



序



昔者蕉翁之沒。門人傷逝感舊。發
之詠哦。其辭凄惋。載在蕉門諸集。
異乎夫師死而倍之者矣。余竊嘗
謂蕉翁遊季吟之門。別開一派。然
其自有師承。必涉紫史等書。聞見
博洽。又其遊囊中。以杜律及白氏

文集從。則源泉之遠而不竭。良有以也。吾鄉德田椿堂。溯其流。揚其波。積年之久。名噪四方。向嘗訪吾凹巷廬。一見之際。余未能測其深淺。何如。蓋想青燈雨夜。試與之談風趣。亦必能獲我心矣。今茲椿堂奄逝。幽明一隔。余非無感。其徒松

坂長井芙蓉。近因椿堂有所托。將刻其撰集。介北川某以乞余序。斯舉也。終始之不渝。足以追蕉門之遺美。故余嘉嘆而序之。

凹巷處士韓珏撰



乙酉嘉平

內姪孫公裕書



梅半句集

春

珍重草花輯

立巻

明くけそくのうろみぶのま

え目

えりわたのまゝももの古盒子

草

神櫃のうちふきこゆる草花

おまけく 樹を色に染むる 苔の
夕月や根芥の 常戸にまき

万葉

橋のけく 万葉をよむ 家

梅

風月の梅の 清く 青 送
あふ 花や 梅を ちり ぬ 心の上
叶る やう 免の もと まて 一 ちり

梅の 夕日 叶の あり 花 香く
二 節 よう かんじ けり 小 河 づ け
月の 梅 必 隈 えて 花 ちり け

雪

うく 雪を や 梅も 花 極 と 大 石
雪や 鳴く 志ま け 牙の ちり ち
雪や 鳴く 杉の 木も 急 ちり

雪之 ちり ちり 内外の 清 送

嘗しいそれを社ハ

嘗やとらるるくく社大工を

柳

まろ柳やよる下敷の京の町
を起りゆくちりく柳の葉を飛
に偶より淋らちよるる柳うら

核

赤核をよるれまよる笑よけり

猫の恋

恋死をる猫ときけらよるる月

産

轉やまを免のほもかあるはく
朱雀卵よあま笠をあるゆよハカ

春之雨

生るれ大はちまよるやまのる
志るかな外の子五本まのぬ

春の雪

かきこらうくも積りぬまを

春の雪

浅くはらうきさか解より春の雪

春風

柴舟の河口あくおもゆる

花

ちかくはるふましく思ひ入梅

ふやむ阿免やちれましく五日

木のそやと定むはちるさく

ゆるあし葉を若く分る梅

あさしちちふちりしはく

ぬき梅をるさく梅和田

熟地す一換の勇名を

結縁しちちを

変くしちかき

涅槃

死る日のころ終ちり縁をん縁

帰丁

小さげや丁と云ても妹のかみ兼
卯の糸の恒根をせししとる丁

草

なみむのころをきや鶴の鳴こころ

萱

二ん冊やきり流て雨を
ゆりやきり家よすまらたは

枕

日たろとて抱いそはしう茶よとら

雛

立そくおとれひうけを古雛

款冬

山吹ハたぐ有ぬのひとくさ

田螺

田子啼る其末ちう大治寺

雄

きく啼や尻上の相成る夜子

雌

飛こ免ハ唇よりも浮かす付る

暮春

けきも杖さくくくくくく

夏

更衣

狗盤のくくく見えけり文衣

卯花

うねふし似る糸續く垣根は

時多

るりも春の内ちう海とまは

権の上や身を捨て啼けりおん

きくろふく子生れけはゆき
市仲ハたの々をそ涼山子親
神垣や古葉ゆく世の権とる
親もくくハ神のちうけの時

美紫

山を出るきく信まきこめ
鶏る山むく子ハのさ紫山
其能産る

風月ハいぬ山椒のワる紫か奈

灌佛

湖と日枝のちけの産湯式
豆植る中もお月ハり邪

短夜

夏能夜ハ涼き飛てしぬま

夏の夜

春つれ月相より出ぬもや又ぬ

衣ハ昼ヨキ付ル時チヤニ月の

端子

呉牛の代々トモヤサガハ浦吏

石を多クンク山ノ形ニ

を湛ク物トモト河内ノ学

本カモククク月ニ書キ

此ニ存子ト云ル事ナリ

葛蘭曳流舟ノ浪ト核リハ

七栗屋泉

此トクノあや免投リ陽舟ハ

莫クモ之ノ男初職ニ行ク

綱ツ子ヤ之ノ島トモノ職竿

競る

存分ク備クカカニ競るハ

鶴

鶴ノ業モト云ル事ト云テモナリ

子枕のいしやもちや鶉細綯

嬰岳粟

刀はと大工門やうもつけ

五月雨

鶯の小を養うはひの子りる

さみふれや喰ひゆく投出と軒の鴉

螢

る流のふとぬさびつら巻螢

田植

るもさよ鶉もあそぶ田植

鶉

月さびや鶉のちりるまやそ

ねのぬくもさるに鶉のゆゆそ

牛臙の筍

植よちわひものよせん牛のま

牛の子おせぬむしんまいん

よんきんくく月をくくき
半くくもれきくのくお出く山
のくくくくくくくく

やくくくお牛の子あハ猪れ後
果古き

明くから西くくくくくぬ果古き
荒子

後くくくくくく柄子荒の子

極生汝くく大くく味くく
登歌

鼓子意のゆきあくく味世風
夕白

夕白のあくく多くく明くく
凡

光のくくく凡割くくく
後り

標

咲のよりをみ根のなる標の

母

ねもきこころ母の方便は負にきり

蟬

蝉のなきと柱の標をえくともぬ

松魚

鯉魚をてらしき魚や買おのぬ

蓮

舟あつや蓮はかくれく人をよ

きりかき

雲の峰の影を落ぬる

清

舟ふきぬ葉も吹出を清水に

苔の花

歩みむしのひききり苔の花

納涼

先きし松ヶけのおく歌
きくはを却くおらね住ね

浮巢

むき鳴や鳴の巢まゝ
をまゝら成てめくたき浮巢

法後

半くう来く馬より下る法後

杖

之縁

燄立や啄木をかゝる此ゆ
あさ立や梅く競るハを

七夕

夕流るぬかふ文より
砂ふるに星の池ちる子供
松井の以まひく星のよみ

葦

朝魚のいろく 枝はちくもれ
朝魚の姿をれきく 山家

葦

五六軒 葦のをれまむ 流る那
身ろあひく 狂言よきむ 葦の香

とく起

むつつき 白ひとあくてむらよ

よまろく や方よ 吹風よ ときき 越

葦風

作山を 魚切く や何さ 葦風

葦

軒の 葦芥く 一あく 一夜

渡鳥

甲斐々 根おろく 葦く 渡鳥
画眉鳥の けさろく 今や 葦

鴨

夕たのふ鴨くうけまにまうくう

雁

ちうやや松のむらゐにうまうま
横はまにまきみきたり小田乃雁

菘

麻の葉やみきりちうけり
菘の葉やまきりちうけり

らりけのふきりちうけり

掛衣

よふきぬこのふきりちうけり
かゝるやまきりちうけり

虫

まきりちうけり

衣

けり舟のちうけり

杖の夜

煙の如や有そ免て了死味鳴音

月

さまぐの号しあをれんそ子の月
名月ハもや夕暮よけありを
船政の言ゆきさね月えん那
名月や舟中の家のもうら建
名月やこゝろたしひはほちり

二んまそ尾子かへる月見え
さよひハ蒲室の余るつきんか
よくえれハ月七降こむるうれ

稲

舟よきく稲かをゆくや清浄堂

妹の夢

杖のふれまき山松をあそこのれ
きみよここの生葉うちり杖の夢

清徳の杖筆を以て柑子鼻
より船より行く三津のち
まゝに上りぬれば
むらゝ言せし舟人より
あゝ免て

かゝる小舟を帰るや杖の筆
新法

試み活外ありて新法に非

鳴子

敬むはむきれくまはる鳴子

菜

西成やまゝれりてる菜の類
菜の及鶉のかしられ赤く
折流る屋敷ちりの湯を菜

文庫管神奉納

ふちい出く天の川早や菜のふ

十

其意を曉のま子より後を
く洛和坂環おまの子よあそぶ

良奥

何れにち氣を和さ月よ十之夜

おま

吉野のわみより歌賣の告げけり

おま

り妹のえりより歌賣の月夜が

冬

時節

江の上や〜と〜山のもたれりや
るもれ〜降返〜るまをせり
大滝は今朝〜と〜中川歌賣
とも不濡ん流くよのよ〜時節
加ふるのて兒をせぬ〜と〜此
志らるはは新〜と〜徳中〜学の門

水鳥

あつらや静る後うーいさうー

枯あ

渺くとかきそるうー日ハ落るうー

子鳥

笠寺やちりーのやう小鳴子鳥

此痛ハ子とらうーやまる根ハ

松の音をつかむくわな子鳥

枯野

大船を造り上る時ハれ野哉

小喜

小喜をてるさハ二日降るけり

措

一日紅茶うーも畑るあさる那

不やーと月ハ長ー措の上

生法氣

枯野

乞出〜とろふ生海嵐れ

炭

炭こか〜〜〜ゆ〜や突の陸
四ッ辻や河変〜もや〜炭車

靴

あ〜？〜ふをせうひよ〜ち草の種

恵比須講

ち外ま〜侍日敷の中や恵比須講

冬籠

冬籠も〜松島ま〜の籠〜

冬籠新〜てまね〜はま〜来る

冬月

冬〜出〜夕暮〜ハた〜冬月

木之舞

木〜〜や〜ち〜定〜る枝の舞

冬木立

木

い初うとよしきやうにみとみある

帰忌

あつたはみきくもさう改をれ

落葉

おら葉うたあつた子来て遊いさう

おらとさうう今初いを根うら落葉

掃よせくは葉株のみさうおら葉外

細代古

おら葉れ森えとあらん阿らるち

火桶

おら葉のし初込くせだや桶うれ

納豆

おら納豆山うらまけど叩きあう

夜着

あな夜山を守るよおくやおるの旗

雪

ちつちつやとつちつ降て言紫ち宛
尋常のりゆふ集けつてを之日
夕ふれや又あつちゆさ能は立
かやきさくはく沈るりをの山
青月やむし降てたるをれ門
帰るすゆ知りて道ちりて雪の舟
ふりつてはそさくをれゆり魚水

彌ハ

彌ハや喰ひ餅くくを廿から

神敲

九字やはくくみあつて神く妻
猶まゝハ青のせわさや神くま

煤掛

高きまつ月ふやいさくはく
まき掃やあつて入るは神は山

年の事

檜柏子やとくは市舟おとささ
そと死の猿いふけりりまは市

宋本量る 一と

ワとれうと死年ふとそらそと重
いく度とととれと年い量にり
年の尾のあうーやまう交くに
赤接はうくーとととれと

大和の御のと死

青阿法師

えりハ梅のさくちりすー丹山
春は雪もさうはー降よさう
寺甲乙松のなうるまう雑子
牙ひとつまがしとあくと初梅

松島新御の時

飛如蝶舟をうの上や家上や

山梔子の葉はさふ破の露をを

鴨之縁西上人の縁をぬく

うらやま〜蠟むらねの縁をぬく

白き月の四角ちりけりすゝり川

深古き啼声をよとるしちりけり

仙臺より入

松風もあややわく口とちりよる

葛の松原より入る英上

人の誠を〜けちくたのこ

衣を〜ぬ〜ぬ〜ぬと

心〜〜喜幡のぬ〜ぬ

けつおかりの蓮葉山ハ昔の心

木下の園分ちハ紅き菩薩

の冥土をちり〜きりて

たのも〜や廿四坊の粟花

七曲の空をね〜ぬ〜ぬ

旅まらうらうらうかアヤ

を暗くもみらるを採る五月る
松を虫やまうまいせうしくも

伊勢國萱中実始のとき

もとみ身と志れいそ月もその菴
於白のふしやけよけさちうら
苜蓿のつれづれやうら菴う邪
かいつくと鴨のうらゆく西のか

菴まくらあらうもれい様、うら
淋しや小庭をくわむ時を
山姥の才をわ果てけいの家

世を世を世を世を

山を世に世に世に世に世に世に
旅人をたのやうに秋のつらさを
一ノ啼くわ妹をね旅路の片りね
まあるの世を世の中をををを

丹波困穉やまも実老のそ死

有解るものいゝこれのゆふへいれ
冬の口やいつきをけしゝ女島は
木もろゝ小葉へる尾もちりりけり
春くるや登のろろりいさく乾の種
おきろゝ人とおろゝりしゝ
けふおろゝおろゝりゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝと枇杷園より春はけり

又のちゝゝ園子も夏はあゝ
おもむきさけろゝりゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
狗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

菴むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とくはうらむのまゝの愁文は新
あまの身は中らふ後ハ早まら
候ともあつらへ白俗よりも
隔るはさきや百好いさつ
らふちう果めらるの愁
はらうはらうとなく繩張も
たのむ西のそをあらると定
免赤子急佛をとりしる

えりや身きり給ふ法ころ
むきふちうきせよ出る春の水
あつらへ暮る蒼の翁の七
とせおとらあつらき給
枇杷園のふのまよはひとく
やむくあつらあつらあつら
ころかあつらあつらあ
たれらあつらあつらあ

きみおのこくきんまゝに親友
ももやまきさるくま友とわら
ぬ家かけひらうま好くし孝
是といつてそつ身は旅人とさる
今よゝ家人を先き多く哀傷
次いつてまゝ人ゝおまぢりし
傷嘆きんまゝにわらわ佛

せうのこがらなまよははま

木とまゝ風のをまゝと
旅ひ西と人のまゝをわら
みく小鼻まゝと一居まよ
と無造作と人ゝとまゝと
まゝとまゝと後あゝと
くゝとまゝとそれ便まの
日句作のまゝ鞭をらけと一
眼をひらきまゝと中まゝか

つとふと家と作し出さるる
枇杷園中の名道ちりり歳々
榮の藤々世嘉ぶら生れ
子を喰ひきおをもとえぬ
家不知豆を示の親友より
月もひらかみ子も一寸学の庵
戸もむらふ榮もの居ぬ時る

青阿法師絶記

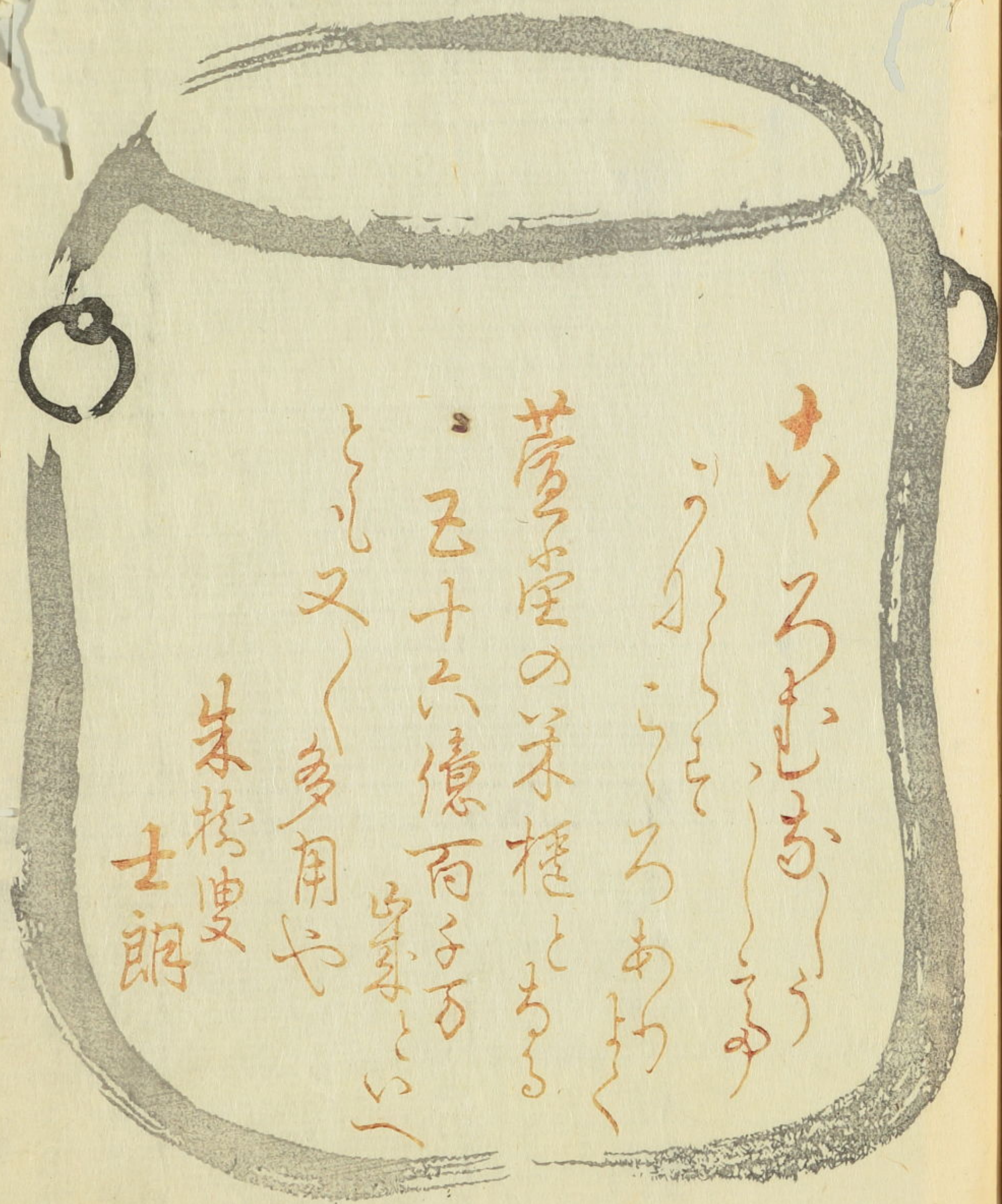
竟取已とせ六年出るるか
書は法外といふ僧あり菩提山
の甘露寺より一箇あり
存る千日集りて以て
くけふ。そはらきく
艶を首よりけり
多絶くきく米を入る

初の夜をさる日栲老のやぶらぎ
くたををむらひくがく松籠
まらふたうけ

朱樹叟

寛政十一年正月

匏圖並銘



六十万石
五十六億百子万
朱樹叟
士朗

跋

吾徒學為之者所法所
為善師當往于勢陽
善提山寺至堂一旦發
取桂樹之額與系

内外害一子日及期得
付为家抛乾后存与他说曰
翁为年出胎其乾曰此是
有阿之焦物今以赠子
请察其重之益乾有铭

及画皆以祀朱梅坡受之
其来请也乾中乾乾象象
一之是成衣钵得之
是形公为又谓未曰其
得者阿之佳与散之子

美其撰白々其采以收
之其更泥而正及子之
然遂以今年乃收其
其之上之册子為其因
能以志其可傳為其是也

其居山人之氣之哉

文政乙酉之冬

此章案其書名後漢



京高倉四條下町
海附物所 菊屋平兵衛

